

あの日あの頃 - 7

創立のころ

石松寿美子

さかやかな秋晴れのひととき、久方ぶりに六年生の女子とともに、屋上にのぼってみました。

やわらかく、緑色に補装された屋上は、こども達が楽しく遊ぶことができるよう、色も鮮やかに数々の丸が書かれ、また、回りの花壇にも手が入れられて植木も形よく刈られ、温室も、すっかり整備されておりました。

四方を眺めると、如何にも近代文化の象徴とも言える、さまざまなマンション、高層ビルが迫る中、目の前にそびえ立つ心の支えの教会の塔だけは、色こそ塗りかえられたとは言え、昔からゆるぎなく今も同じように、毅然と建っているのが見られました。

しかし、鐘つき堂の上を、淡く白い雲が、時の流れを告げるかのようにゆるやかに過ぎ去っていきました。

喜々として飛びまわる現在の六年生の姿と、場所こそ違え、以前の五・六年生の女子が休み時間はいつもコンクリートの屋上で、鬼ごっこに、なわとびにと興じていた、少し丈の長いスカート姿とが重なって、なんともなつかしい思いに駆られました。 -

中央に音楽室があったその屋上も、立派な特別教室として整い、四階となりました。雨の日は、走って授業を受けに行ったことも思い出されます。

この屋上のある体育館も、かつては、お百姓さんが肥やしを撒いているところも見られた畠で、竹垣で囲まれていました。

たまには、ボールがころがりこんだりしたのですが、十四期の方達の四年生のとき、大工事が行われて出来た、式に、会合に活用される大切な体育館です。

緑の畠がずっと広がり、のどかな田園風景が見られた昭和三十四年四月、女子の髪には白リボンが結ばれ、全員白手袋の正装姿で、目黒星美学園小学校初めて一年生から六年生まで揃っての始業式が行われました。

当時、修道院は、現在のお聖堂の場所にありました。用がある場合、ドアの上から垂らされた紐を引くと、"チリ、チリン"と、鈴が鳴り、シスターが、「何ですか」と、笑顔で出て来られました。何と、お名前を間違えても必ずご本人が出てきてくださいました。後でお詫びしたことも思い出です。

五月、各学級思い思いに構想を練り、多くは卵の殻を細かく砕き、念入りに夕方遅くまで残って丁寧にモザイクで MARIA 様を徳の花で仕上げ、心をこめて聖母祭を祝いました。

昭和三十五年三月、第一回の卒業式がおごそかな中で、すでのないサレジオ幼稚園の構堂で挙行されました。

そして、その翌日、忘れもしない四月から六年生になる二期生は、修学旅行に出発しました。

ご存じ、昔ながらの造りで、その頃ガラス戸の無かった「おいでやす。」「おかえりやす。」の京言葉もやさしいワンダフルおばさんの松井旅館に三拍、京都、奈良を見学しました。一泊目は、夜遅くまで話し込んでなかなか寝つかれない様子でした。翌朝、旅館前から観光バスに乗り込みましたが、出発と同時に“ざあーっ”と、粉雪が舞い、行く手を美しく、白く染めた光景は、実に印象的で、今でも目に浮かびます。京都市内を巡っての途中、米屋さんの店でお手洗いをさせていただいたこと、また、帰りの京都駅では、特急つばめ号の発車を遅れさせたことなど、なんとのだかなことが通用したことか、今ではとても考えられないことです。

まわりの景色と同じように、心にゆとりがあったように思えるあの頃、授業は七時間、毎日四時ぎりぎりまで勉強しました。その上、年一回のこどもバザーでも充分力を発揮し、学校のためにもよく助け合って活動しました。

昭和三十六年三月、いよいよ第二回の卒業式。練習のため、何度重たい四角い木製の椅子を腕にかかえて、信号もなかった教会前の道を往復したことでしょう。不平も言わず真剣に練習したことを思い出します。現在信徒会館が建っている場所にあった、古く、外側の壁もこわれかけていた講堂の掃除も、本当に大仕事、まだまだうすら寒かった日、足を水でびしょびしょに濡らしながら洗い清め、式に備えました。卒業式の有様が今もって思われ、万感無量です。

昭和四十年、創立十周年の記念行事が行われたとき、六期生が六年生でした。

女子全員が展示品としてクッションを作りました。一つ一つきれいにビニールをかけ飾りました。また、劇の発表、そしてキュロットの体操着での大運動会など、大活躍でした。

その年、東京オリンピックが開催され、学校のテレビで開会式を、顔を寄せ合い見たことも大分前のことになりました。

八期生の一、二年生の頃は、父兄同伴で遠足を実施したこと、毎年七月、高学年は山中湖へ林間学校へ行く慣わしが、八期生の五年生のときは、都合で岩井海岸へ行ったことなど、思い出はつきません。

年毎に、次々と巣立って行かれた忘れられない卒業生。今では、立派に成人され、重鎮となって活躍する社会人として、また、家庭人としてそれぞれの役目を果たしておられます。

そして、そのお子様方が入学され、学校の歴史が積み重ねられて行くことは、ほんとうに楽しいでうれしいことです。

とりとめもなく、ただ思いつくままに、なつかしい事ごとを記しました。

最後に、同窓会のますますのご発展をお祈りし、筆を置きたいと思います。

【同窓会報、第7号・昭和62年12月1日発行・から転載】